

府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2010年 夏号 8月11日発行/季刊
発行人：竹内 章
連絡先：府中市分梅町 1-20-3
TEL 042-364-3428

第11回 バス見学会

昨年の「フェリス女学院大学・三溪園」など毎年、かんきょう問題・まちづくりへの取り組みの一環として実施しておりますバス見学会も今年で11回目となりました。

ごみ処理に関しては府中市においても大きなテーマの一つですが、今年の見学先に決定しました「横浜市資源循環局金沢工場発電所」は少なからず参考になるものと思われま

横浜市資源循環局金沢工場発電所

平成13年に稼働した横浜市の最新鋭の工場で、1日に約800トンのごみを安全、衛生的に焼却しています。ごみを焼却して発生した廃熱をボイラーに回収し、蒸気タービン発電で隣接する下水処理施設へ供給、エネルギーの有効利用を促進しています。



港の見える丘公園及び各国西洋館

花壇に囲まれた公園の展望台からは、横浜港やベイブリッジ等が一望できます。また横浜市イギリス館、山手111番館（ともに横浜市指定文化財）など公邸や住宅として使用されていた各国西洋館が見学できます。



2010年バス見学会

- ◆日程： 9月28日(火)
- ◆見学先：
横浜市資源循環局金沢工場発電所
港の見える丘公園及び各国西洋館
- ◆集合場所と時間：
大国魂神社鳥居前 午前8時30分
- ◆申込先：
府中かんきょう市民の会
バス見学会世話役
安田(042-364-3979)

ダストボックス廃止と収集有料化、その後

今年2月2日、40年以上続いたダストボックスが廃止され、ゴミ収集が有料化された。その後のゴミの問題について考えたい。

ダストボックスは住みやすさの大きな要素であり、この廃止・有料化は当初、市民にも不満が多かった。ボックス廃止・有料化後のゴミ量は市によると実施後の3カ月間合計で9373トンと前年同期の12267トンに比べ24%減となった。

ボックス廃止・有料化の功罪は、ボックス廃止で街の景観がよくなり、歩行者・自転車の邪魔になっていた歩道が広く使え

るようになったし、夏場の悪臭がなくなった一方で、いつでも捨てられる便利さが失われ、収集日まで家庭内保管が求められることから、公園など公共場所への不法投棄が増えたことが指摘されている。

市民は、今まで以上に3Rに努め、将来も他市委託による処分では済まなくなり、自前の処理場を市内に建設する必要にも迫られるだろう。ゴミ減量効果を見守るとともに、生ゴミ堆肥化や分別の徹底、リサイクルへの強い関心で生活環境を見直すことも求められている。
(高橋和夫)

10年目のレンゲまつりで 来場者アンケート実施

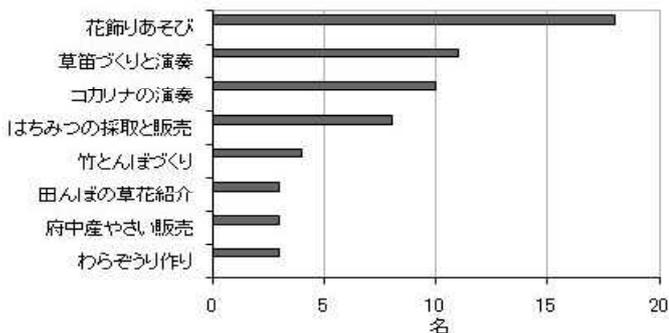
今年のレンゲまつりは10年目を迎え、一区切りという時期になりました。そこでこれからのやり方を検討するために、来場者へアンケートを実施しました。皆様のご協力で72名の方々の回答を得る事ができましたので、ここで紹介します。

最初にレンゲまつりへの参加理由を伺ったところ、「レンゲ田の風景やレンゲの花を楽しみたい」という回答が半数以上でした。今年はレンゲの咲き具合が思わしくなく残念な思いを持った方も多かったのではと案じられます。参加回数については、初めての方とリピーターの方が半数ずつでした。またレンゲまつりの情報は「知人・友人から」「チラシ」「広報ふちゅう」「ポスター」「のぼり」などの順で様々な方法で得ていることがわかりました。

さて、イベントについてのご意見は「1番楽しかったイベントは？」と、「これからも続けてほしい、イベントを3つあげてください」で質問しました。グラフをご覧ください。

「花飾りあそび」が人気のトップ

1番楽しかったイベントは？



人気のあるイベントについて実行委員会の反省会でその理由を推察してみました。

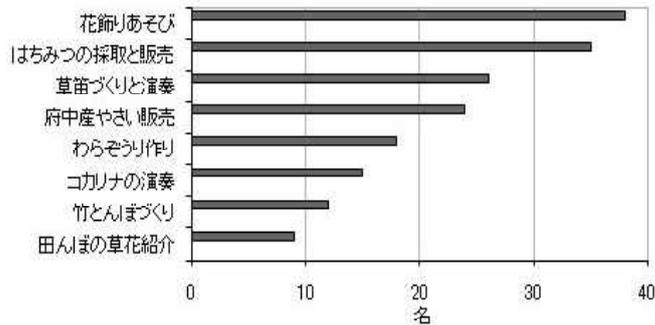
「花飾りあそび」がダントツな理由は、①花をふんだんに使った「花飾り」はとても可憐であること、②他のまつりにはないイベントであることなどが考えられます。しかし花を集める担当者からは、前日や開催中も花集めに出かけるなど、大変苦労をしている事。やっと集めた花を、そのまま持ち帰る来場者にも気を配らねばならないなどの実情が話されました。

一番楽しかったイベントの2位で、続けてほしいイベントでも3位に位置している「草笛づくりと演奏」は、当日だれでも一応は鳴らすことはできる事が喜ばれるのではないかと思います。また、レンゲ畑に関東草笛の会の河津氏の演奏するメロディーが響き渡ると、何とも言えない清々しい感動を覚える方も多いのではないのでしょうか。

「わらそうり作り」は、熱心に取組む参加者を、つきっきりで指導するため、担当者は昼食もままならない事情などが話されました。

その対応策として、ぞうり作りを指導する人を増やすことや、道具を使って担当者の負担を軽くする方法を検討することになりました。

続けてほしいイベントは？



その他、材料の「わら」を確保するために、「田んぼの学校」でとれた「わら」を良い状態で保管することも重要な準備項目であると確認しました。

昨年からはまった「コカリナの演奏」は、なかなかの人気イベントになりました。今年も子ども向けの曲や、みんなで歌う曲の演奏があったり、「草団子」という手遊びを取り入れたり工夫を凝らした構成でした。中でも「踊ってくれる人いませんか？」の呼びかけに答えて「崖の上のポニョ」を踊った男の子には暖かい拍手が起こり、大変なごやかなコンサートになりました。

アンケートの記述には「いつも子どもが楽しみにしています」「ずっと続けてほしい」などの、まつりの継続を希望するご意見がたくさん書かれていました。また、来場者が近隣の調布市、小金井市だけでなく、横浜市や杉並区、世田谷区など6市2区に広がっている様子から、都内のレンゲ田が貴重な存在になっている事がうかがわれました。

なかなかない「花咲か爺さん」

レンゲまつりは①レンゲ田を増やし、ふるさと景観を保全する、②自然に親しみ昔遊びを伝える、という2つの目的がありました。「レンゲ田」の自然の中で遊ぶことは十分に達成されていますが、レンゲ田を増やそうという思いは叶っていません。逆に10年前の9カ所から今年は3~4カ所にまで減りました。レンゲ田そのものが都市では珍しい存在になっています。

市民の会の栽培担当者は、種まきの時期や回数、防虫対策など毎年工夫をこらしています。しかし天候や気温、田んぼの条件など難しく成果があがりません。レンゲの花が1面に咲いているピンクの絨毯を思い描きながら今後も試行錯誤を続けていくことになるでしょう。

「レンゲまつり」は多くの方々の協力に支えられて開催されています。

アンケートを実施して、私たちは、これからも来場者と市民の会の会員が楽しめる「レンゲまつり」を工夫しながら続けていこうと思いを新たにしました。アンケートに協力して下さった皆様ありがとうございました。

(梅沢みどり)

レンリソウ保全努力実る 第4回 河原に咲く花の観察会

観察会は、講師が解説する開花した植物に名札を取り付け(約50種)、最後尾のスタッフが名札を回収する方法をとった。参加者は草花への関心が高く、講師の説明を熱心にメモしたり、写真を撮ったり、わずか2キロ下流の解散地に着いたのは12時近かった。



5月29日、朝よりどんよりとした空模様で薄寒く、テレビでは雨の予報も出ている。参加をキャンセルする電話が相次ぎ、参加者は昨年より10名少ない27名となった。

講師は例年のとおり東京農工大学の星野先生。関戸橋付近の河原で、河川の地形とそこに生育する植物や、外来種が在来植物の生態に与える影響などの説明がある。外来のオオキンケイギクが昨年より少し増えたような気がする。この花は黄花コスモスに似て美しく、市内でも観賞用に栽培されているのが見られる。しかし繁殖力が強く特定外来植物として個人が栽培することも法律で禁止されているが、このことはほとんど知られていない。

また、この河原にはカワラサイコ・ミゾコウジュ・ミノボロ・レンリソウなど希少種が生育しているが、オオタカが絶滅危惧種としてよく知られているのに比べ、これらの草花の存在を知る人は少ない。観察会では植物に興味を持ってもらうと同時に、外来種や絶滅危惧種の問題にも少し関心目を向けてもらいたいと願っている。



黄花コスモスに似た繁殖力が強い
特定外来種オオキンケイギク



最盛期には38株が開花し、
保全活動が実りつつあるレンリソウ

観察会で毎年一喜一憂させられるのはレンリソウの開花状況である。マメ科の植物で小葉が対生しているのを連理の契り(夫婦仲がよいこと)にたとえてこの名がある。紫紅色の2cmほどの小さな花を一株に4~8個つける。府中ではここでしか見られず、市外からも観察にくる程である。昨年の観察会では過去の草刈りの影響で花はまったく見られなかったが、今年は18株(最盛期は5月21日の38株)の開花がみられた。

この付近は国による草刈りが年数回行われていて、レンリソウが無残に刈り取られことが過去に何回もあった。そこで2年前に国の協力を得てロープ柵で囲った植生調査区域(約400㎡)をもうけた。7月と11月に有志の市民で詳細な調査とレンリソウを残しながらの草刈りをおこなっている。今年の開花はようやくその成果がでてきたものと思われる。来年はさらに多くの花が期待できそうである。

草花の保全活動は、4年まえより初めた草花調査や観察会がきっかけで始まった。調査区域内にはカワラナデシコ・クララ・ワレモコウなどなど草原性の草花(これらの草花は人手が加わることにより維持される)が見られ、市内では貴重な自然のスポットである。話が半分それてしまったが、多摩川の一角で可憐な野草を守るための小さな取り組みが進められていること付記して「河原に咲く花の観察会」の報告とする。

(野口道夫)

グリーンウェイブ 2010 四谷下堰緑地で植樹

四谷下堰緑地は、昔多摩川から農業用水を引き込んでいた府中用水の一部でした。その後水田の減少などにより、用水路としては使われなくなり、6年前まではゴミの不法投棄もあって荒れ地に近い状態でした。

その場所を、府中市と府中かんきょう市民の会のみなさん、地元住民の協働でゴミを撤去し、歩道を整備したりして、市民が中に入れる緑地に変えてきました。

緑地内に自生していたヒガンバナの植え替え、ヤブカンゾウ、キツネノカミソリ、センニンソウなどの夏季の草刈りからの保護、樹木の名称の表示なども行ない、平成20年には府中市主催の景観賞を受賞するレベルまで自然は回復しました。

ところが、平成21年10月の台風で緑地内の高さ10m

を超えるニセアカシアが6本倒れ、危険なため、危険樹木として、市は同22年2月に近隣住宅の近くのニセアカシアの一部を伐採しました。

「こころふれあう 緑ゆたかな 住みよいまち」をキャッチフレーズにしている府中市としては、伐採後の植樹などの対応策も求められるところですが、今回のグリーンウェイブの呼びかけに呼応することで新たな植樹を行なうことができました。

今回はグリーンウェイブ2010として、府中市としては初めての参加でしたが、昔ながらの武蔵野の雑木林を守っていくには、ある程度のお金と手間をかけて外来植物の侵入やゴミの不法投棄などに対抗していく必要があります。

今後とも、皆さまのご参加とご協力をよろしくお願いいたします。
(小西 信生 / 日新学区まちづくりの会)

国連の「国際生物多様性の日」に府中市では初めて実施

国連が定めた「国際生物多様性の日」である、今年5月22日(土)10時から11時過ぎまで、府中市四谷下堰緑地で市民35名(小学生など13名、成人22名)が集い、植樹祭を行いました。

当日は天気も良く風かおる季節で、アカシアの木々の沢山の残花をはじめ、エゴノキやイボタノキ、マユミなどが満開でした。

植栽した苗木は、里山に生えるシイ、カシ、クヌギ、コナラの4種類各6本ずつ合計24本で、3人から4人のグループで植えました。植え付けの時、特に小学生など子供



は最初の植え穴掘りで、アリや幼虫が出ると奇声を上げていましたが、すぐ慣れて一所懸命に作業をしている姿がとても印象的でした。ぜひ苗木が大きく成長するようにみんなで見守りたいものです。

この植樹祭は日本の生物多様性事務局である環境省に登録され国連事務局にも報告され公表されています。一方、生物多様性保全の主旨にそった今回の植樹祭は府中市では初めてでもあり、市公園緑地課のご支援もいただきました。また、この植樹祭は生物多様性の保全とその理解を深めるため今後も継続されます。

今回の植樹祭は、私たちが生活するまちの快適環境づくりにも大いに関連しています。今年3月に見直しされた「府中市緑の基本計画2009」の基本目標の一つ「ともに育

てる緑豊かな美しいまち」に盛り込まれている市民・事業者・行政が「協働によるまちづくりの実現」の方針は「国際生物多様性の日」と共通した意味を持っています。

このようなこともあり、今回の植樹祭の概要について、多くの皆さんに見ていただき理解が深まることを願い、植樹祭現地の2か所に分かりやすくまとめた、次のような説明板を設置しました。機会を見てぜひご覧ください。



一本の木が世界をむすぶ

「いろいろな生きものが、つながりあって暮らしている」こと(生物多様性)を大切にするため、国際連合に加盟している188か国以上の国々が連携して、「生物多様性条約」をむすんでいます。

5月22日は、この条約(約束)をむすんだ国々が生きものを守り、環境を良くするため、多くの人々や団体などが協力して木を植える「緑の波」(グリーンウェイブ)と決めています。

府中市内では、初めてこの国際的な活動に参加しました。今回のこの活動は府中市の支援と地元の下記3団体が連携して、ここ「四谷下堰緑地」に武蔵野の雑木林や鎮守の森に生えているシイ、クヌギなどの苗木を植え、これからの管理も行います。

今後、いつまでも生物が安全に暮らし、環境が一層よくなるよう、この活動がより多くの地域に広まることを願っております。

平成22年5月22日(国際生物多様性の日)

四谷西部自治会

日新学区まちづくりの会

NPO法人府中かんきょう市民の会

府中市水と緑事業本部公園緑地課

グリーンウェイブ（緑の波）とは

世界各地の現地時間の5月22日の午前10時に「各地で一斉に木を植えよう」と国連や環境省など生物多様性事務局などが呼びかけています。しかし、地球上の各地は時差があるため、植樹が東から西へ波のように広がる様子から「波」に例えています。

地球上の生物は何種類くらいでしょうか。現在約3・000万種以上とされています。このうち環境悪化のため、毎年多くの種が絶滅にさらされています。こうした状況を食い止めるために、今年10月に名古屋市で10回目の「生物多様

性締約国会議が開催されます。この会議は、世界の生物多様性条約に加わる188カ国が参加し、日本が議長国となり、2011年から2020年までの生物多様性の保全などの目標を決めます。

一つ目の目標は、開発や温暖化などによる「生物多様性の脅威を減らし生態系の保全と回復を目指す」全体目標です。二つ目には、全体目標を具体化する「絶滅危惧種の保護」や「条約を実行するための人や資金対策」など20の個別目標を決めるとも大事な会議です。

(グリーンウェイブ・プロジェクト)

今年も始まったよ！ 田んぼの学校



泥まみれの田植え

○ 6年目を迎えた田んぼの学校は、市民の方々に少しずつ認められてきたみたい？(応募状況の概要) 今年の募集は、5/1～5/20の間に行いました。その結果、40名の募集に対して71名の応募があり、抽選の結果44名の方に入学の案内を送りました。

参加を遠慮いただいた27人の方々への連絡は、田んぼの学校を始める前のつらい作業でした。農工大のご好意でお借りしている水田に限られた面積であることから、安全かつ充実した運営を行うために、どうしても目配りできる人数に限られます。

本当は、多くの方々に参加いただくことが、田んぼの学校が目指す府中の農業(ひいてはわが国の農業)や米文化への理解を深めるという目的に近づくことになるのですが…。色々思うこともあります。今年も参加される皆さんと一緒にがんばります。

○ 新スタッフと新生徒で、フレッシュなスタート！

田んぼの学校は、農工大と府中かんきょう市民の会が協力して行っています。さらに映像記録を撮っていただくため、悠学の会(生涯学習センター・ボランティア活動グループ)にも参加をお願いし、運営を行っています

今年は、農工大スタッフの世代交代があり、4名の新人が参加してくれました。また、当学校を支えてくれる経験豊かな卒業生達もおり、仕事が忙しい中、駆けつけてくれるので、心強いかぎりです。

田んぼの学校では、参加者した子供達から多くの質問を受けるので、スタッフも色々と学習をしなければならず、小さな参加者達に育ててもらっています。



○ 「田植え初体験」
「きゃー、きゃー」
いいながら、きっと楽しいんじゃないの？

2010年6月5日。田んぼの学校の開校日は、暑くもなく寒くもない曇り空でした。夏至を半月後に迎える6月の太陽の強さは、すでに真夏並みになっているので田植えにちょうどよいお天気であったといえるでしょう。

田んぼの学校のカリキュラムの中で、田植えは最も人気のある作業です。田植えは、米作りの最初の農作業であると共に、田んぼの学校のオープニングイベントでもあります。

田植えをはじめる前に、イネの育て方や生産性の高さなど、主食作物としてのイネの優位性の話しを一通り聞き、苗の植え方なんか勘どころを教えてくださいました。

今年は、コシヒカリ(うるち米)とベニロマン(古代米:赤米)の2種類を育てます。無事、苗が育って収穫した後は、皆でおにぎりを作って食べる予定です。

さて、田んぼに移動です。参加者は田んぼの東西の二手に分かれて田に入りました。しばらくすると、例年にもれず「きゃー」とか「うー」とかの悲鳴とも気合とも判らない声があちこちで挙がります。荒木田?の「ぬる～」「ねえちゃ～」とした足の感触は都市生活の中ではちょっと体験できないため、はじめての感覚なんでしょうね。

最初は、おそらく気色悪いものなのですが、慣れてくると足指の間からにゅる～と押し出る泥の感触や思ったより暖かい水の温度など、意外に心地よさが感じられるようになります。こうして田んぼの学校の米作りは、まず全身泥まみれになることから始まってゆきます。

今回は、7月に田んぼの草取りと生きもの調査と一緒にやります。麦藁帽子と捕虫網を持って「インテリげんちゃんの夏休み」という20年前の新潮文庫のコピーの世界が、農工大の研究フィールドに出現します。

参加総数104名(生徒+父母+スタッフ他)

(田んぼの学校スタッフ 落窪一人)

府中市環基本計画の中間見直しについて

(これまでの経緯)

府中市環境基本計画は策定から5年が経過し見直しが必要になりました。基本計画は平成12年8月に公募ボランティア市民58名(当会の委員20名を含む)で構成された「府中市環境基本計画素案検討会」が設置され、環境の分野別に4分科会で、60回を超える会合を重ね、平成14年8月に素案検討会から府中市環境審議会に報告されました。

環境審議会ですらに検討を加え、市の庁内調整と市民説明会を経て、平成15年1月、10項目に及ぶ重点施策を含めた環境基本計画を市長に答申しました。

●市長からの見直し諮問内容

基本計画見直しのため公募市民、市民団体、事業者、学識経験者15委員から構成された環境審議会が平成21年2月に設置され、市長より次の4重点施策について「より一層推進するための三位一体の仕組みや、そのために必要となる見直し内容について」諮問されました。

○重点施策6「自然エネルギーの利用や省エネを推進し二酸化炭素排出量を削減する」

○重点施策8「校庭の芝生化を推進するとともに、エコスクール化100%を目指す」

○重点施策9「全ての市民が自然と触れ合い、環境学習に取り組む仕組みづくり」

○重点施策10「市民や事業者、教育研究機関と行政のパートナーシップの構築」

●主な見直し結果

○重点施策6「自然エネルギーの利用や省エネルギーを推進し、二酸化炭素の排出量の削減に努めます」

- ・政府の掲げる温室効果ガスの排出量削減中期目標の内、国内削減分を府中市全体の中期削減目標とする。
- ・自然エネルギーを利用した太陽光発電システムや太陽熱利用システム、家庭用燃料電池システムについて関係機関の助成制度を利用して計画的に導入する。
- ・市内の全ての街路灯をLED型に替える。
- ・省エネ住宅やハイブリットカー等環境対応エコカー普



及のために支援制度の整備。(庁用車も順次環境対応車に切り替える)

- ・庁舎内に二酸化炭素削減を目標とした「専門プロジェクトチーム」を設置して、市全体の削減に向けた施策を立案する。
- ・大規模事業者は2020年までに二酸化炭素の排出量を2005年比で6～8%を削減する。(都の方針)

○重点施策8「校庭の芝生化(草地化)などを進めるとともに学校のエコスクール化100パーセント化を目指します」

- ・全ての市内公立小・中学校の校庭を芝生化する。
- ・学校ごとに省エネを推進するとともに、太陽光パネルの設置や雨水の利用などの環境対策や環境学習などを計画的に実施する。
- ・環境学習に関する教材を整備するとともに、環境学習プログラムを作成する。
- ・エコ活動を支援する組織(仮称:学校環境ボランティア制度)を整備する。
- ・エコスクール化100パーセントを達成するための全体計画を整備して推進する。

○重点施策9「全ての市民が自然とふれあい、地球温暖化などの環境学習に取り組む仕組みをつくります」

- ・環境学習の場としての水辺の整備や、ふるさとの小川再生など、親水空間の整備を進める。
- ・環境学習を推進していくための環境活動保全センター(仮称)を整備し、環境に関する情報を収集・整理・提供する。
- ・環境学習リーダーを育てる環境学習を推進する。

○重点施策10「環境保全活動センター(仮称)が中心になり、市民や事業者、大学などの教育機関と行政とのパートナーシップを築きます」

- ・環境保全活動センター(仮称)と各主体が意見を交換する協議会の体制確立、情報の収集や提供、環境保全活動の実践などを支援する。
- ・東京農工大学や東京都立農業高校などの教育研究機関との連携を推進し、市民による自然環境や生活環境に関する学習意欲を高める企画を支援し、市民の参加を求める。

平成22年3月29日、市長に見直し結果答申書を提出(写真)しました。

●基本計画を推進するための行程表

重点施策を推進するために、具体的な施策を設定し、いつまでに実施するかを示した行程表(ロードマップ)を基本計画の別紙として作成しました。

特に、重点施策6の自然エネルギーの利用について、市としての温室効果ガスの削減目標を設定したため、環境対策費として大幅な予算確保が必要であり、市としての強い姿勢が望まれます。(府中市環境審議会委員 竹内 章)

第7回 身近な水環境の全国一斉調査

当会として第1回より参加している「身近な水環境の全国一斉調査」は今回で7回目。毎年6月の第一日曜日に実施している。年々参加団体数は増加しており、昨年の参加団体数は1011団体、調査地点総数は5683地点となっている。

当会は、多摩川の府中管内の6地点を担当し、測定している。6月6日会員5名と、かんきょう塾から3名参加されたので、今回は下流と上流の2班に分かれ調査しました。調査結果と考察は下記のとおりです。

<考察>

① COD値、昨年と比較して調査地点名1・2・3はほぼ同様で、4・5・6は悪くなっている。その年の雨量にも関係するが、2年続けて悪化しているのが心配だ。

② 一号水再生センターと本流の合流場所、川底(4×12m)にコンクリート石が疎らに置かれた。周辺は稚魚がたくさんおり、釣り人も多数いた。

③ 大丸堰、全体の水量も多く透視度も良いが、COD値は思った程良くない

④ NECニューライフプラザ、昨年同様水面上に泡が多かった。二号水再生センターの水処理の結果と思われる。透視度は良い。

⑤ 府中クリーンセンター南の調査地点では、濁りが見られた。

*参考 下水道法での規制値 PH 5.8~8.6

BOD(生物化学的酸素消費量) 10mg/L 以下

*河川の水質と魚の関係はどうだろうか。

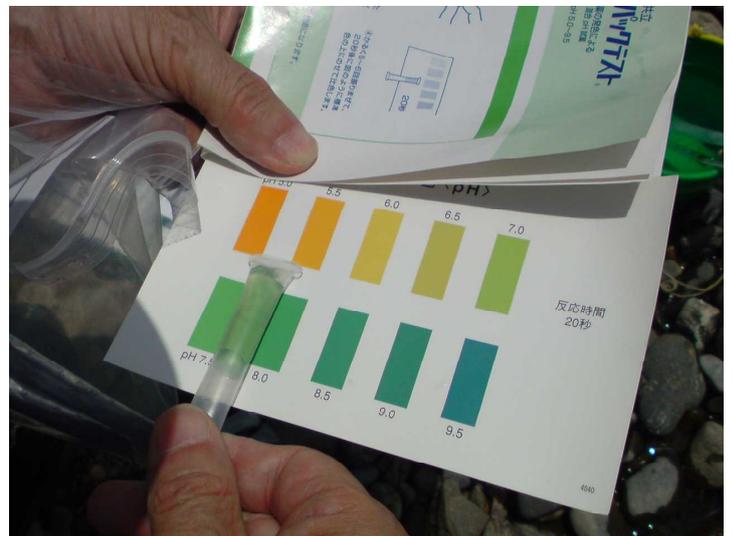


<調査結果>

平成 22 年 6 月 6 日 (日) AM9:30 ~ 11:30 天候 晴れ (前日晴)

調査地点名	気温	水温	COD 平均	PH
1. 稲城大橋下流 (一号水再生センター)	25℃	23℃	8 以上	7.0
2. 東京電力鉄塔南	27℃	22℃	5 mg / ℓ	7.3
3. 大丸堰	27℃	22℃	5	7.5
4. 多摩郵便局南	29℃	23℃	8 以上	7.5
5. NECニューライフプラザ (二号水再生センター)	26℃	23℃	8 以上	7.0
6. 府中クリーンセンター南	24℃	21℃	7	7.5

COD(化学的酸素消費量)



水質汚濁防止法での河川の環境基準は
水産2級 BOD 3mg/L 以下(サケ・アユ等生息できる)
水産3級 BOD 5mg/L 以下(コイ・フナ等生息できる)となっている。

CODとBODの関係は、BODはCODに比べて小さく、CODのおよそ0.5~0.6倍です。ただ多摩川水系と荒川水系については、生活雑排水の関係でBODはCODより大きな値になります。

「身近な水環境の全国一斉調査」によって、全国水質マップが作成される。

関東水質マップは、多摩川水系・荒川水系・利根川(江戸川)水系などである。

各水系の中流、下流の水質を見ると荒川・利根川(江戸川)水系での概略COD値は6以上であるが、多摩川水系では3~6mg/L 未満が多い。

荒川・利根川(江戸川)水系と比較すると、多摩川水系は水質が良い。
(五十嵐 四郎)



矢崎小学校4年生 多摩川の自然を学習

今年二月、郷土の森・旧尋常高等小学校で行なわれた「府中水辺の楽校発表会」に、矢崎小学校4年生(当時)約50名が参加しました。水辺の楽校子供実行委員の活動発表に続いて、4年生達は、1年間の多摩川学習の結果を、「美しい多摩川を残すために私たちにできること」として発表しました。

子ども達は、多摩川にいろいろな魚や鳥や虫がいることや、河原の植物のことなどを学習しながら、河原に捨てられたゴミに気付きました。「花火の燃えかす」、「バーベキューのゴミ」、「タバコの吸い殻」等などが目に付くことを報告しました。そして子ども達は、「多摩川にゴミを捨てないで下さい」と、来場者に呼びかけ、「私たちにも、ゴミを拾って、多摩川をきれいにすることはできます。」、「ぼく達も目に付いたゴミを拾うようにします。」と口々に発表したのです。

今年度も、当校の4年生が多摩川の学習に取り組んでいます。5月21日その第一回が、府中水辺の楽校スタッフの支援で行なわれました。以下はその時の学習のようすです。

生徒数約50名、担任教師2名、応援教師2名、支援スタッフ5名。場所は多摩川大丸堰の上。

生徒たちは3班に分れ、「鳥」、「植物」、「昆虫」の3つの分野を、各20分間移動しながら勉強しました。

3つの分野には、夫々専門の支援スタッフがいて、学習を支援していました。

「鳥」を観察する場所には、2台の望遠鏡がありました。子ども達は、入れ替わり立ち代り望遠鏡をのぞいて、鳥の羽や足や嘴の色などをはっきりと観察します。スタッフ達は、「虫を食べている鳥」、「魚を狙っている鳥」、「水草を食べている鳥」等々説明しながら、鳥たちに焦点を合せます。子ども達は、望遠鏡にとらえられた鳥の自然を、驚きの声をあげながら、飽きもせずに見入るのです。

この日は、多摩川には珍しい「ササゴイ」が来ていて、



子ども達は思わぬ収穫に大喜びでした。

「植物」の観察場所では、シートの上に、「多摩川にある食べられる植物」がいろいろと並べてありました。支援のスタッフが、それぞれの植物名を言いながら、河原の草の中に食べられるものがあることを教えていました。「へー、これ食べられるの。」「食べられる草がいろいろあるんだ。」と驚きながら、河原を見る目が変わってゆきました。

むかし子ども達は、イチゴのある茂み、セリの水辺、実が良くなる桑の木等々、よく知っていました。子ども達には、そんな自然の空間がありました。スタッフ達は精一杯の工夫をして、子ども達にそんな空間があることを教えようとしていました。



子ども達がササゴイ(左下)やツマグロヒョウモン(左)を見つけて大喜び。多摩川の自然の豊かき、少しはわかかったかな。

「昆虫」の観察場所は、河原に立つ「ギシギシの花」のまわりでした。支援のスタッフが、ギシギシの花のところをよく見るようにと云います。「わぁーキモチわるい！アブラムシだ！」「テントウムシもいる！」「この白いのはテントウムシの幼虫？」「アリがたくさんいる！」。

子ども達はそこに3種類の虫がいることに気付きました。そして、テントウムシがアブラムシを食べていること、アリがアブラムシの何かかかたべていること、アリがテントウムシを追い払おうとしていることに気付いたのです。

「ギシギシの花に付いたアブラムシを食べにテントウムシがきました。アリもアブラムシの糞を食べにきました。」「アリは、テントウムシにアブラムシを食べられると、自分たちの食べ物なくなるので、テントウムシを追い払って、アブラムシを守ろうとしています。」支援のスタッフが、このギシギシの花で繰り広げられている、生き物たちの相関を説明し、これを実際に目で確かめた子ども達は、「キモチ悪い」が、「へーすごいな」に変わって行くのでした。

矢崎小学校の4年生は、これから12月頃まで、いろいろな角度から、多摩川を学習するそうです。

来年の彼等のまとめの発表が待たれます。(梶島弘通)